夕闇のともだち

木村薫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
夕闇のともだち

【Ｎコード】
Ｎ３５９２Ｈ

【作者名】
木村薫

【あらすじ】
『オレンジ公園で遊んでいると，黒い陰に喰われる』。夏休みに，ヘンなウワサが流れていた。でも，気にせずに遊んでたんだ。いつも通りにさ。かくれんぼは連戦連勝の悠太。ある日の夕暮れに見知らぬ男の子に声をかけられる。「オレが勝ったら，こーかんこ」

「悠太(ゆうた)ぁ。おーい」

啓介(けいすけ)の声が聞こえる。陸人(りくと)の声も。へへっ。二人とも僕がこんなトコにいるなんて，考えもしないんだろな。

桜の木の茂みから見下ろしながら，必死で笑い声を抑える。二人がくっついたり，離れたり。公園の端から端までを探しながら困りきった声を出すのを見てるのが，気持ちいいんだ。かくれんぼ，最高！　けど，いつまでも隠れたままじゃマズイ。公園の時計は五時を回っている。いくら夏休みだからって，帰るのが遅くなると怒られちゃう。せっかく二年生で外遊びが自由になったのに，キンシにされたらたまらない。

二人に声をかけてから，茂みの中から飛び降りる。その物音で振り返った二人の顔は，怒っていた。

「悠太(ゆうた)，反則！」

「そうだよ。木の上なんて」

二人そろっての抗議に，カチンとくる。

「だって，オレンジ公園の中だったらいいんだろ？　木の上がいけないなんて，決まってなかったじゃん」

「そうだけどさぁ，早く見つけられないよ」

「悠太(ゆうた)も知ってるだろ？　……ここ，ヤバイから早く帰ろうよ」

陸人(りくと)の弱気な声に，夏休みに流れ出したウワサを思い出す。

「ユウレイがでるって？　陸人(りくと)，本気にしてるワケ？」

「だって姉ちゃんが」
「そんなん，大人が流したウソに決まってるじゃん」

オレンジ公園で五時過ぎまで遊んでいると，黒い陰に喰われてしまう。

そんなの，ばかげてる。オレンジ公園は，昔は保育園だったところを園庭の藤棚や木，遊具を残したまま公園になった所。だから，ここらで一番大きく日陰も多くて遊びやすい。

けど，大人は物陰が多いと『ユウカイ』や『ヘンシツシャ』が出てくると心配している。公園内の木も，近々切り倒されるらしい。こんなに立派な木，中川にも生えていないのにモッタイナイ。とにかく，僕のママもオレンジ公園で遊ぶといい顔しない。だから，幽霊話なんて大人が自分の都合で流したウソに決まっている。

「そうでもないらしいぜ。オレの兄ちゃんの友達も『オレンジ公園はヤバイ』って」
「えー？　女子追い出してドクセンしたのに，そんなコト言うのかよ」
「だって，黒い陰は日が沈む直前に出てくるって言うし……」

一緒にセミの抜け殻を投げつけて，亜美（あみ）や鏡花（きょうか）達を藤棚から追い出したじゃないか。仲間だろ。

なのに，啓介（けいすけ）と陸人（りくと）の視線が僕の向こうをチラリと見ている。時計だ。

ムカムカと，嫌な言葉が腹の中から湧き上がる。なんだよ，なんだよ！　はっきり言えよ！

「二人とも怖いんだろ！　さっさと帰ればいいじゃん。弱虫！」

セミが鳴いてる。僕も泣きたい。
なんであん時，啓介（けいすけ）と陸人（りくと）にどなちゃったんだろう。なんで『弱虫』なんて言っちゃったんだろう。
ジャングルジムの上で夕焼け空を見上げながら，溜息をつく。真っ赤に染め上がっていく入道雲が，どんどん大きくなっていく。東の方から，青い黒さがどんどん近づいてくる。遠くから豆腐屋の車が流すマヌケた笛の音が，微かに聞こえる。駅前の豆腐屋さんの出前車。ソコの豆腐，パパ好きなんだよなぁ。家であの音が聞こえる頃，好きなアニメが始まるんだ。もう，六時半かな。お腹，すいた。
啓介（けいすけ）と陸人（りくと）に明日，謝ろう。まだ半分ある夏休み，たくさん遊びたいもんな。
そう思って，ジャングルジムを降りようと手元を見た途端，視線にぶつかる。
見たこともない顔のヤツが，僕の横にいた。瞬きしない目が，まっすぐ僕を見ている。ヤケに，見開いた目。長めのザンバラな髪の毛。薄汚れたTシャツから伸びた腕は，なんか汚い。
喉まででかけた悲鳴を飲み込んだ。

「なに，お前」

声が震えてしまった。一瞬，ウワサの『黒い陰』かと思っちゃった。んなワケないじゃん。

「かくれんぼ，しよ」
「はぁ？　」
「悠太（ゆうた），かくれんぼ，好きだろ」

なんでこいつ，僕の名前知ってるんだろ。ひょっとしたら，近所

の家の親戚かなんかで，遊びに来たヤツかもしれない。

「かくれんぼ」

「もう，帰るトコだけど」

「悠太(ゆうた)が勝ったら，何でも願い事，叶える」

「……何でも？　」

コイツ，何言ってるんだ。そう思った。けど，頭の中にやりかけの宿題が浮かぶ。読書感想文に，夏休みの日誌，漢字ドリルと計算ドリル。どれも最初の五ページで終わってる。まさか，まさか。

「いいよ。宿題，やるよ」

「って，読書感想文もだよ。マジで？　」

「うん。でも，悠太(ゆうた)が負けたら，悠太(ゆうた)の全部もらう」

「……はぁ？　」

なんだそれ。全部って，なに？

「こーかんこ。悠太(ゆうた)とオレ，こーかんこ」

よく判らない。けど，まぁいいや。僕が負けるハズない。本当なら宿題やらなくてすむし。いいじゃん。

「いいよ。けど，本当に宿題やれよ」

「悠太(ゆうた)も，約束まもれよ」

そういったソイツの口が，真っ赤な口が開かれた。生臭い風に，頬を撫でられた。

背中がゾワッと震える。まさか，ね。

ルールは簡単。十分間，隠れればいい。
僕はとっておきの場所に隠れた。公園内のトイレの裏だ。敷地ぴったりに作られているから，裏に回るには屋根から入るか道路からフェンスを乗り越えるしかない。壁とフェンスの隙間は三十センチ。ギリギリだ。
僕はすぐに屋根に上り，物音させずに隙間に体をねじ込んで息を潜めた。
これで宿題をやんなくていい。そう思った。その時は。
でも，今は違う。
そっと目だけ動かして腕時計の液晶画面を確認する。あと二分。
いつの間にか，薄暗い。セミの鳴き声も消えてしまった。犬の散歩の人も通りかからなくなっていた。僅かに，隣近所の家から大音響の野球中継が聞こえる。おいしそうな夕飯のかおりもする。今頃，家に帰ってご飯を待ちながらマンガ見てたはずなのに……。
後悔していた。アイツは，普通じゃない。
啓介（けいすけ）達なら，探す時に足音がする。気配がする。
でも，さっきから音がしない。声もしない。「おーい」とか「どこだよー」とかも，ない。
心臓の音だけ，耳元でバクバク聞こえる。体中が脈打つように震えだす。
こーかんこ。
あいつの言葉が何度も頭の中で繰り返される。いやだ。勝つのは僕だ！
あと一分。
このまま逃げたい。逃げて家に帰りたいよ。ママの顔が見たいよ。
壁に張り付いたまま，そっと腕時計を見つめる。
だいじょうぶ。あと三十秒。

なんにも怖がることない。あと少しで勝つんだから。
生臭い風が，また吹いてきた。やだなぁ。
あと二十五秒，二十，十五，あと……もう，勝ったもどーぜんじゃん。
宿題を押し付ける自分の姿を想像したとたん，僕の頬に何かがポタリと落ちた。
雨かよ。
そう思い，壁との隙間から空を見上げた。

「悠太（ゆうた），負け」
「……！」

まるでクモのように，屋根からはいつくばって，壁を下りてきている。
夜の真っ暗闇より暗い目を細めて，熟れすぎて割れたトマトのように真っ赤な口をにんまりと開けた。
澱んだ用水路のような生臭い息が僕の顔にかかる。口から垂れたよだれが，僕の目の横にポタリと落ちた。

「こーかんこ。やくそく」
「ぎゃあああ！」

めちゃくちゃに腕を動かした。足を動かしていた。
気付いたら，フェンスを上っていた。腕も足も，擦り傷だらけになってフェンスを乗り越えて道路に飛び降りる。
こわい，こわいよ！　ママ！
全速力で後も振り返らないで走る。駐車場を横切って，マンションの自転車置き場を走り抜ける。
ウチへかえろ！　ウチへかえるんだ！
自動ドアがじれったい。はやく！　はやく！

エントランスへ転がるように駆け込んで，エレベーターのボタンを連打する。
ドアが閉まり，いつもどおりに六階へ上昇。その微かな振動に安心する。
ここまできたら，大丈夫。大きく息をつくと，自分の足がカクカク震えているのに気付く。あぁ，怖かった。

「ただいまぁ」

エレベーターから玄関まで小走り。玄関を開けると，ふうんわりとスパイスの香り。
やった。今日はカレーライスだ。手を洗って着替えよう。Tシャツぐらい替えないと，ママはすぐ怒る。

「あ……あら，あの……」
「わかってるって。ちゃんと手を洗うし着替えるから」

やばい。ママ怒ってるのかな。
洗面所に飛び込んだ途端，ママが不思議な顔をして立ち尽くした。
自分から手を洗うのが，そんなに変かな。
ママは，目を丸くしてお玉を手にしたまま立ち尽くしている。怒るような，怖がるような，考え込むような，不思議な顔をしている。
帰るのが遅かったから，心配したのかな……。
謝ろうか。そう思った瞬間，ママの後から僕が顔を出した。

「なんだよ。来たのかよ」

僕の顔で，僕のお気に入りのTシャツで，ソイツは笑っていた。
真っ赤な口。真っ黒な目。間違いない。

「ママ，さっき公園で遊んだ友達。ごめんなぁ。カード忘れたから届けてくれたんだろぉ？　下まで送ってくよ」

ママ，僕だよ！　僕が悠太だよ！

なのに，ママは「また一緒に遊びに行ったら駄目よ。もう……悠太ったら」とソイツの頭を撫でてキッチンへ戻っていく。

ママ！　僕が悠太だよ！

叫ぼうとした途端，ソイツがすごい力で腕を掴んで引きずっていく。

エレベーターに乗せられて，一気に下降していく。地の底まで，沈んでいく。

「こーかんこ。そう言っただろ？　」

ソイツが振り返る。

エレベーターの壁の鏡に，僕だった後姿が映っている。もう一つは，さっきまでソイツの姿だった僕が。薄汚れてボサボサ頭の，ソイツだったはずの僕が。

「ぜーんぶ，こーかんこ。おもちゃも本も，体もママもパパも，全部こーかんこ」

歌うように言うと，ソイツは笑った。

軽い電子音が鳴り，エレベーターが止まった。扉が開かれて，押し出される。

そんなの，やだよぉ。そんなの，ないよぉ！

慌ててソイツの足を掴んだ。

「しょうがないな。一つだけ教えてやるよ」

見上げたソイツが，笑った。もう，真っ赤な口じゃない。

「僕と同じ事をすればいいんだよ。夕方，日が暮れる寸前に声をかけるんだ。またやればいいんだよ」

まるで僕みたいな喋り方をして微笑みながら，僕の手を蹴りつけた。

「『勝ったらこーかんこ』ってさ」

閉じられたエレベーターのドアが，鏡のように僕の姿を映していた。

熟れ過ぎたトマトのように，口を耳まで裂けさせて笑っている。

そうだ。かんたん。またやればいいんだ。そしたら，ママやパパのいる家に，帰られる。

スキップしながら，エントランスを飛び出た。

どこの公園，行こうかなぁ。

オレンジ公園は，もうダメだし。ドカン公園にでも行こうか。亜美（あみ）や鏡花（きょうか）も遊びにくるだろうし。

中川から聞こえるカエルの大合唱が，気持ちいい。

だれと『こーかんこ』しようかなぁ。

（後書き）

雑誌の『お化け屋敷特集』を読んでいたら，衝動的にホラーが書きたくなってしまって……。
一気に書き上げたので，変なところがあると思います。
ご指南いただければ嬉しいです。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3592h/

夕闇のともだち

2010年10月10日04時42分発行